2025 年 1 月 1 日発行　通巻第 320 号

全科協 News

vol.55
NO.1

CONTENTS

P2　特集
P10 海外博物館事情
P12 1月2月の特別展等
P14 リニューアル情報
P16 トピックス

表紙の写真の解説は、P16 の「我が館の推しなモノ・コト」をご覧ください

特集 Special

外部資金活用の取り組み

JCSM
Japanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会
〒110-8718
東京都台東区上野公園7-20　国立科学博物館内
TEL 03-5814-9171
https://jcsm.jp/

外部資金活用の取り組み

コロナ禍や物価の高騰、長く続く自治体の予算削減などを受け、博物館を取り巻く経営環境は厳しい状態が続いている。資金を調達するためには入館料収入を上げたり、ミュージアムショップやカフェ、賃貸料などによる収益を上げるといった方法もあるが、近年はクラウドファンディングやふるさと納税を利用して広く寄付を募ったり、助成金を獲得したりなどといった外部資金を活用する博物館が増えている。

国立科学博物館が「地球の宝を守れ」というキャッチフレーズでクラウドファンディングを実施し、あっという間に目標金額を達成したばかりか最終的に９億円を超える金額が集まったことは記憶に新しい。クラウドファンディングは災害時や緊急事態に陥った場合など、話題性がありメディアに取り上げられやすい場合には成功しやすい一方、何度も繰り返し実施することは難しい側面もある。寄付制度を一過性の資金調達の手段としてではなく、博物館を応援してくれる人々との関係を構築していく手がかりとして活用できなければ、社会からの理解は得られず未来の博物館活動へはつながっていかないのではないだろうか。

本特集ではクラウドファンディングをはじめ、ふるさと納税の活用、基金の創設、スポンサーシップやサポーター制度、研究や活動に対する助成金などさまざまに外部資金を獲得して活動されている４つの館園に具体的な事例をご紹介いただいた。いずれの取り組みもさまざまな示唆に富む貴重な事例である。各館が今後それぞれの特長を活かしてどのような資金獲得戦略を立てていくべきなのか、考える契機となれば幸いである。

神奈川県立生命の星・地球博物館　主任学芸員　石浜　佐栄子

継続的な仲間集め・財源確保としてのマンスリーサポーター制度

国立科学博物館 科学系博物館イノベーションセンター
倉島　治

1．クラウドファンディングによって得られたもの

国立科学博物館（以下、科博）では、多様な財源確保の試みを実施しています。その一つに2023年にREADYFOR社のプラットフォームで実施したクラウドファンディング「地球の宝を守れ」プロジェクト（以下、CF）があります。CFでは目標を大きく超える支援をいただきましたが、注意が必要なのは、コロナ禍における入館料収入の激減、エネルギー費や資材費の高騰などに対処するため、短期集中型の事業として実施しており、長期的、継続的な支援を求める形ではなかったことです。CFでは博物館の基幹事業である「標本・資料の収集・保管」（以下、コレクション事業）が危機に陥っていることを訴え、それらを未来へ継承する博物館の役割に対して理解と支援を求めました。コレクション事業は、地球や生物の歴史を意識し、長期的に進めることが必要であり、継続的な財源確保が本来必要となります。

ただ、CFには、財源確保以外の多数の成果がありました。一つは、科博の活動や課題が社会に認識されはじめたことです。科博では、多くの研究員が関わってコレクション事業を実施しており、それが展示や学習支援を生み出す土台となっていること、毎年約８万点の標本・資料の増加があり、それらの適切な運用に課題を抱えていることなどを周知できました。また、CFでは「地球の宝を守れ」というコンセプトを掲げ、多くの支援者から賛同をいただきました。博物館が保存し、未来へ継承している標本・資料全体を指して、地球の宝としましたが、この宝は当然ながら、科博だけで維持・管理ができるわけではありません。地球の宝を守ることへの賛同が得られたということは、日本の広域で多くの博物館と連携してコレクション事業を進めることへの期待があると考えられます。この重要性は従前から認識していましたが、CFを通して再認識できました。三つ目には、科博を支援してくださる方々の存在を可視化できたことです。CF支援者の方々の居住地に偏りはありつつも、全ての都道府県の方々からご支援をいただき、科博を支えてくださる日本全国の方々とCFを通して繋がるきっかけを得られました。

2．CFの成果を活かす取り組みとしてのマンスリーサポーター

科博では、より長期的に財源多様化を進めることをCFの実施期間直後から検討しはじめました。その中で、科博や科学系博物館への支援者や潜在的支援者へ、博物館活動をより広く理解いただくことで、「博物館を継続的に支えてくださる仲間」となっていただく継続的な寄付制度（以下、継続寄付）を立案しました。これは、期間を設定して支援を募るのではなく、継続的に月毎の一定額寄付を募る形式を検討しました。寄付募集の目的は「標本・資料の収集・保管・活用や調査・研究活動、展示・教育活動のさらなる発展のため」と幅広く設定して、そのことを「地球の宝を守りつづける」という言葉で端的に示すこととしました。CFとの連続性を意識しつつ、より広く博物館活動を知っていただき、その活動へ賛同を求めるかたちになります。

科博では、既に継続的な取り組みとして、賛助会員制度（以下、賛助会）という寄付会員制度を2004年より運用しています。既に多くの会員の方々から支援いただき、「青少年の自然科学等への興味・関心の向上に関する事業」、「地域博物館等と連携したイベント」、「標本資料の製作、購入、保存、修復」といった活動を実施してきました。賛助会の特徴として、会員の方々とのコミュニケーションを重視し、対面でのイベント開催や活動報告に重点を置いていることがあげられます。一方で、遠方の方々とのコミュニケーションは難しいという課題もありました。そこで継続寄付では、より広い地域の方々とのコミュニケーションも目標として設定しました。CFを振り返ると、READYFORやYouTube、Xなどのオンラインサー

表1．マンスリーサポーター制度の月支援額と返礼の設定

	1,000円／月	3,000円／月	5,000円／月	10,000円／月	50,000円／月（限定30枠）
かはくの深遠研究室だより 記事版講読（年6本）	○	○	○	○	○
かはくの深遠研究室だより 動画版配信（年6本）		○	○	○	○
かはくの深遠研究室だより ライブ配信参加（年6回）			○	○	○
コレクション収集報告 記事講読（年1本）	○	○	○	○	○
オンラインパーティー参加（年1回）	○	○	○	○	○
オンラインパーティー 動画版配信（年1本）		○	○	○	○
オンラインパーティー アフターセッション参加（年1回）			○	○	○
限定エッセイ講読（年数本）		○	○	○	○
ディスカバリートーク アーカイブ動画配信（年3-4本）			○	○	○
館長・副館長 バックヤードツアー招待（年1回）					○

ビスを活用して、日本全国の方々と繋がることができました。ここから、再度同様のプラットフォームを活用して、新たな支援の輪を拡げようと考えました。具体的には、CFで連携していたRAEDYFOR社が運用する継続寄付プラットフォームであるマンスリーサポーター制度を採用しました。また、支援者の方々への返礼についても、オンラインでの交流・コミュニケーションを重視して、検討を進めました。まず、科博の研究員がコレクションを紹介し、標本・資料の由来や魅力、研究・展示などの博物館活動を紹介するライブ配信とそのアーカイブ動画配信や記事配信（「かはくの深遠研究室だより」ライブ配信、動画版、記事版）を準備しました。これは、CFの際に好評だったコレクション紹介のライブ配信を引き継いだもので、「地球の宝を守りつづける」ことがどのようなものか支援者に見ていただく目的があります。次に、研究員が科博のメールマガジン上でリレー連載しているエッセイに加筆をした豪華版エッセイ（マンスリーサポーター限定エッセイ）を届けることを計画しました。これは、研究員が自身の研究や担当コレクションについて研究員の日常なども交えて紹介することで、より科学を身近に感じてもらう内容となっています。3つ目として、上野本館で土日祝日に実施しているディスカバリートーク（展示内容や研究内容について紹介するトーク）をアーカイブ動画として提供することを検討しました。これまでディスカバリートークは上野本館への来館者しか観覧できませんでしたが、研究者がおこなっている博物館活動を理解いただくのにとても適した内容であるため、アーカイブ動画の配信を準備しました。4つ目として、オンラインパーティーの開催を計画しました。これは支援者と科博の研究員、職員が集まり、普段聞けないような内容を含めた交流会をオンライン上で実施するものです。付随して、オンラインパーティーの様子の動画配信や、より少人数で実施をするオンラインパーティアフターセッションへの参加なども計画しています。そして、対面イベントとして、館長および副館長が収蔵庫内を案内するバックヤードツアーも計画しています。これら、支援者の方々への返礼、および月々の支援額による支援コース設定を整理し（表1）、2024年4月より、READYFORプラットフォーム上（https://readyfor.jp/projects/kahaku-supporter）にて「地球の宝を守りつづける―マンスリーサポーター」として開始しました（図1）。当初目標として、CF支援者の2％前後の方々が継続的な支援者となってくださるという想定で支援者数を1,000名と設定しました。2024年9月末までの半年間で、「かはくの深遠研究室だより」ライブ配信、動画配信、記事配信のセットを3回、マンスリーサポーター限定エッセイを4本、ディスカバリートークアーカイブ動画を2本、それぞれ実施、配信し、同年10月時点で約620名の方々に継続支援をいただいています。支援者の属性をみると、CF支援者と新規支援者の比率は概ね6：1となっており、CF支援者だった方々がマンスリーサポーターの支援者ともなってくださる傾向が強く表れています。支援者の方々の居住地域は、全体では45都道府県と広域に渡っていますが、CFと同様に南関東の方々の比率が高く、60%を超えています。返礼への満足度については、まだ組織的な調査は実施していませんが、かはくの深遠研究室だよりライブ配信に対するチャットの反応は概ね好意的で、満足度は決して低くないと感じています。

図1．マンスリーサポータートップページ（一部抜粋、2024年11月1日確認）

3．マンスリーサポーターの課題と展望

継続寄付の取り組みは概ね順調だと考えていますが、課題も見つかっています。一つは、CFとの連続性を意識して進めているため、CFとの違いが分かりにくくなっている点です。博物館活動全体を通して科学的情報や知見を社会へ発信し、科学的知識をもとに皆が問題解決に取り組める社会へ貢献するという大きな目標の提示や、コレクション事業を中心としつつも多様な博物館活動について発信することが必要だと考えていることについて、より丁寧な説明が必要です。もう一つの課題は、支援者の方々の居住地域が南関東に偏っており、広域での交流にはまだそれほど至っていない点です。この点、多くの地域においてコレクション事業を中心に成果や意義を知っていただくことが必要だと感じています。そのためには、巡回展示の開発や実施などを積極的に進め、コレクション事業の成果が科博だけでなく、全国の館に波及可能なことの発信が必要と考えられます。また、オンラインコンテンツなど来館せずに体験や観覧が可能なコンテンツを積極的に構築していくことも必要です。これらは、科博の取り組みを発信するだけにはとどまらず、博物館連携や、標本・資料を活用してのコンテンツ開発などが必要となるため、より長い時間をかけて解決していく課題とも言えます。

マンスリーサポーターの取り組みは620名以上の仲間の方々に継続して支えていただいています。この事実は、資金の支援を受けていること以上に、研究員や職員の活動へのモチベーションへと繋がっています。今後は、経過をモニタリングしつつ、課題解決へ取り組んでいきます。

博物館活動への参加と理解を促進する仕組みとしての外部資金活用制度

滋賀県立琵琶湖博物館
山川　千代美
亀田　佳代子

1　滋賀県立琵琶湖博物館における外部資金活用制度導入の経緯

滋賀県立琵琶湖博物館（以下、びわ博）は、1996年（平成８年）「湖と人間」をテーマに設立された総合博物館である。研究を活動の根幹において博物館活動を行っており、研究資金については、県費による研究費の他に、文部科学省の科学研究費補助金や環境省の環境研究総合推進費、民間財団の研究助成など、早くからさまざまな外部資金を取り入れてきた（琵琶湖博物館 2022*）。また、一部の企画展示についても、日本財団等の助成を受けて展示を行っている。しかし、組織として本格的に外部資金導入を打ち出したのは、2013年３月に策定された「新琵琶湖博物館創造ビジョン」からである。このビジョンを受けて、2014年３月に策定された「新琵琶湖博物館創造基本計画」では、常設展示リニューアルを中心とした展示交流空間の再構築の他、多様な主体との連携として企業・大学との連携もあげられている。この中で、常設展示リニューアルの資金の一部を企業等との連携により確保することとなった。それを受けて、先駆的に外部資金調達を行なっていた三重県立総合博物館等の事例を参考にしつつ、びわ博は2014年から「リニューアルサポーター」制度を導入することとなった（写真）。

写真：館内に設置しているリニューアルサポーター等支援を受けた企業・団体等の銘板

2　外部資金獲得のための活動

外部資金の導入には、そのための体制や人員、労力が必要となる。びわ博では、2015年から広報営業課を設置し、企業・団体からの資金導入に取り組む専属の営業担当（会計年度任用職員）を置いた。営業担当者は、企業・団体への最初のアプローチや相手先への訪問の段取り等を担い、年間100～150件の企業・団体へのコンタクトや訪問を行っている。実際に訪問する場合には、必要に応じて館長や副館長、広報営業課長など、博物館運営に携わっている職員が随行し、博物館の理念や活動の説明も行っている。その結果、2015年から2019年のコロナ禍前までに、訪問件数延べ580件、支援件数延べ683件、総額約140,200,000円の外部資金支援を得ることができた（琵琶湖博物館 2022）。

このように多くの企業、団体から支援を得ることができたのは、展示交流空間のリニューアルという明確な目標のため、説明がしやすく内容の理解を得られやすかったことが一つの要因となっている。ただしそれだけでなく、準備室時代から博物館活動を行ってきた中で、地域の人々や企業・団体等とも一緒に活動を行ったり、相談に乗ったりしてきた蓄積があったことが、びわ博への信頼を生み、支援をいただけたという側面もあった。また、新規に訪問した企業・団体には、びわ博の理念や活動を知ってもらう機会となり、新たな繋がりを生む結果となった。このような繋がりは、その後博物館と企業が連携して行う事業へと発展するケースも出てきている。

外部資金導入の継続には、支援者への連絡を絶やさないことが重要となる。詳しくは後で述べるが、びわ博で導入しているサポーター制度は年単位となっており、12月末が更新時期となっているため、支援者には秋頃から翌年の継続について確認と依頼の連絡を取っている。また、館長、副館長が新たに就任した場合には、各企業・団体を訪問して新任挨拶を行っている。定期的、かつ、こまめに支援者への連絡を取ることで、博物館からは近況をお伝えし、企業・団体からは博物館への相談や要望を伺う機会になっている。

このように、びわ博にとって外部資金獲得のための活動は、

表　琵琶湖博物館の支援制度

＜継続的な枠組み＞

制度名	寄附目的	（名称）	対象	期間	金額	特典	税制優遇措置
びわ博サポーター制度	博物館活動・運営全般に対する支援	メンバーシップ	企業・団体	1月～12月	1口50,000円／年（年更新）	• サポーター名掲載（館内・HP） • 従業員・家族入館料：2割引 • びわ博サポーター交流会案内 • 招待券配付 • 企画展示図録配布	• なし
		琵琶湖博物館応援寄附	企業・団体	1月～12月	1口50,000円／年	• サポーター名掲載（館内・HP） • 感謝状贈呈	• 【県内】あり（ふるさと納税） • 【県外】地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）
			個人	1月～12月	（1口30,000円）	• サポーター名掲載（館内・HP） • 感謝状贈呈	• あり（ふるさと納税）
		キャンパスメンバーズ	大学・専修学校等	1月～12月	5,500円～600,000円／年（学生数により異なる）（年更新）	• 在学生入館料減免	• なし
	特定展示の運営への支援	水槽サポーター	企業・団体および個人	1月～12月	30,000円～100,000円／年（水槽により異なる）（年更新）	• サポーター名掲載（館内・HP） • 従業員割引：2割引 • びわ博サポーター交流会案内	• なし
		樹冠トレイルサポーター	企業・団体および個人	1月～12月	100,000円／年（年更新）	• サポーター名掲載（館内・HP） • 従業員割引：2割引 • びわ博サポーター交流会案内	• なし
滋賀応援寄附	博物館活動・運営全般に対する支援	（琵琶湖博物館）	企業・団体および個人	4月～翌年3月	金額指定なし	【県内在住者】返礼品なし 【県外在住者】返礼品選択可	• あり（ふるさと納税）

＜期間限定的な枠組み＞

制度名	寄附目的	（名称）	対象	期間	金額	特典	税制優遇措置
サポーターリニューアル	展示交流空間リニューアルに対する支援	——	企業・団体および個人	2018年度～2020年度	1口50,000円	• サポーター名掲載（館内・HP） • CSR活動パネル館内1ヶ月掲示 • 感謝状贈呈（贈呈式・プレス発表） • 社内研修や催し物等に協力 • 10口以上500,000円は「企業・団体の日」：1日館内で紹介	• あり（ふるさと納税）
水族展示再生プロジェクト「みんなでつくる新水槽」	特定展示への支援	クラウドファンディング「水族展示再生」第1弾・第2弾	主に個人	第1弾：2023年11月15日～2024年1月31日 第2弾：2024年8月28日～11月25日	1口3,000円～1,000,000円 1口5,000円～3,000,000円	• 氏名掲載（希望者のみ）（HP） • 特別礼状送付 • 特別体験	• あり（ふるさと納税）
		水族展示再生支援寄附	企業・団体および個人	2023年度～2024年度	1口500,000円	• サポーター名掲載（HP） • 特別感謝状贈呈 • 内覧会招待	• 【県内】あり（ふるさと納税） • 【県外】地方創生応援税制（企業版ふるさと納税）

博物館の活動を知ってもらいファンを増やすことや、博物館本来の目的である「琵琶湖と人とのより良い共存を地域の人びとともに考え行動する」仲間を増やすことに繋がる活動ととらえている。

3　びわ博サポーター制度の概要

2014年から始めた「リニューアルサポーター」制度は、常設展示の更新が全て完了しグランドオープンした2020年度で終了し、新たな支援制度が設計された。2024年現在で実施しているびわ博の支援制度を表に示す。継続的な枠組みと期間限定の枠組みに大きく2つに分けられる。

継続的枠組みとして「びわ博サポーター制度」があり、目的別に2つのカテゴリーに分かれている。1つ目は、博物館の運営や活動全般に対し支援を行うことを目的としたもので、メンバーシップ、琵琶湖博物館応援寄附、キャンパスメンバーズの3つがある。メンバーシップは、「リニューアルサポーター」制度を引き継ぎ、リニューアル後も安定した活動ができる基盤の仕組みとして整備している。これは、企業・団体を対象とし、支援団体の構成員等に対する優待や割引の制度として、多様な特典が用意されている。琵琶湖博物館応援寄附は、税制優遇措置を伴う「ふるさと納税」および企業版ふるさと納税と呼ばれる「地方創生応援税制」で、こちらは個人枠も設定している。キャンパスメンバーズは、大学や専修学校等大学法人を対象とし、在学生の入館料を減免することで、学生の学びの機会を提供するものである。2つ目は、特定展示の運営への支援を目的としたもので、水槽サポーターと樹冠トレイルサポーターがある。両方とも企業・団体および個人を対象とし、税制優遇措置はない。また、水槽サポーターは各水槽に、樹冠トレイルはトレイルの途中に企業・団体名や氏名を掲示することで、その展示や生物を支援していることを来館者に示せるものとなっている。

なお、この「びわ博サポーター制度」以外に、滋賀応援寄附という制度がある。これは滋賀県が実施している寄附制度で、その寄附先の1つとしてびわ博が入っており、びわ博予算に反映される仕組みとなっている。

期間限定の枠組みでは、2020年度に終了した「リニューアルサポーター」制度の他、2023年2月のビワコオオナマズ水槽破損事故を受けた水族展示再生制度として、「水族展示再生プロジェクト」がある。これは、従来の琵琶湖博物館応援寄附と同様の制度である「水族展示再生支援寄附」と、インターネットを利用した「クラウドファンディング・ふるさと納税型」の2本立てになっている。このプロジェクトは、2023年度か

ら2024年度の２年間限定で、現在取り組んでいるところである。以下の章では、クラウドファンディングの取り組みについて少し詳しく紹介する。

4　ふるさと納税型クラウドファンディングの実施

2023年２月、水族展示室のビワコオオナマズ水槽が破損したことで、しばらくの間、水族展示室は閉鎖した状態が続いていた。その間、来館者をはじめ、びわ博サポーターの企業・団体の方々や、普段から交流のある地域の方々から、多数の応援の声が寄せられ、寄附など支援方法があれば協力したいという申し出も少なからず寄せられた。こうした応援の声を受けて、応援してくださる方々とともに新しい水族展示を再生しようということになった。そのための枠組みとして、期間限定の「水族展示再生プロジェクト」を立ち上げ、その中でクラウドファンディング（以下、CF）にも挑戦することとなった（図）。

図：クラウドファンディング第一弾HP

実はびわ博では、2018年の第二期展示交流空間リニューアルの際、新設する樹冠トレイルへの支援についてCFを実施した。結果は目標額には到達せず、税制優遇措置の事務手続きの負担が大きかったため、CFにはあまり良い印象を持っていなかった。また、地方自治体直営の博物館が主体となってCFを実施する事例も少なかった。そこで、数少ない自治体直営の事例をあたり、直接問い合わせもしながら、実施の検討を行った。当初は、幅広く支援を募り、かつ事務的負担が少ない寄附型のCFの実施を試みた。しかしながら、びわ博の場合、滋賀県のふるさと納税に該当することがわかり、結果的にふるさと納税型のCFを実施することになった。ただし返礼品については、県内の支援者にも県外の方々と同様にお礼をお渡ししたいという想いから、体験型のメニューを用意することにした。

CFの実施にあたっては、部署を超えた横断的なメンバー３名を核に、CFチームを結成した。館を上げて協力体制をとったが、通常業務に上乗せした事業となり、博物館全体の業務量が増大している状況となっている。財政難を理由に、安易にCFを推奨するような風潮もあるが、実施にあたっては相当の覚悟を持って臨む必要がある。

「水族展示再生プロジェクト」では、“みんなでつくる新水槽”を合言葉に、水族展示のシンボルであるトンネル水槽等のアクリル交換を目的とした「水族展示復活へ トンネル水槽再生にご支援を【第一弾】」（2023年11月から2024年１月まで）と、事故で破損したビワコオオナマズ水槽の新展示構築を目的とした「新ビワコオオナマズ水槽誕生にご支援を【第二弾】」（2024年８月から2024年11月まで）の２回のCFを実施した。CF運営会社との委託契約の後、CFチームはまず、ストーリー作り、びわ博と関わりのある方々からの応援メッセージ募集、返礼体験メニューの作成等のCFのウェブサイトコンテンツの作成と同時に、県の管轄部署と調整しながら寄附金を受け入れる仕組みの構築を行った。CFをスタートさせるタイミングの見極めや、盛り上げイベントの検討、随時活動を伝えていくSNS発信の強化にも取り組んだ。そこには、水族展示だけでなくびわ博全体の理念や活動を広く知ってもらい、ファンになってもらえるような内容を盛り込むことを心がけた。

CF第一弾・第二弾ともに、目標金額の達成の有無にかかわらず寄附金を受け取る形式（All in 方式）とした。2023年度は、CFにはのべ796人の方々から約1,100万円のご支援をいただき、112企業・団体からいただいた水族展示再生支援寄附約2,800万円と合わせて、総額は約4,000万円となった（琵琶湖博物館年報2023）。

5　資金獲得だけではない外部資金獲得活動の価値

これまでの外部資金獲得のための活動、つまり、企業・団体から支援を得るための活動やCFは、びわ博では、単に資金を獲得するためだけの取り組みではなく、博物館の理念や活動を理解していただき、共感していただいて、博物館の活動に参加してもらうための仕組みととらえている。本来、公立の博物館の施設整備や修理は、公的機関として設置者である自治体が負担するのが基本であろう。外部資金獲得活動は、資金獲得だけではない意味や価値が付加されたものであるからこそ、今、多くの方々や企業・団体が、外部資金活用に関心を持ち、支援しようとしてくださっているのではないかと考えている。

＊滋賀県立琵琶湖博物館編（2022）『滋賀県立琵琶湖博物館25周年記念資料集』
URL：https://www.biwahaku.jp/publication/history/

関係構築と社会還元のための外部資金“制度”の活用

新江ノ島水族館
ゼネラルマネージャー　飯塚　一朗

外部資金と一口に言ってもその成立経緯などから目的は様々で、法人会員、スポンサーシップ、クラウドファンディング、助成金など全て金銭的支援が中心にはなるかもしれませんが、その制度と会社との関係は非常に繊細で注意深く対応する必要があると考えています。

外部資金の調達については民間と公的機関において根本的な考え方に大きな違いがあるかと思います。

公的機関においては入館者の支持と公的資金の活用のラグがあるのでそのギャップを埋める機能的な手段として外部資金の調達が挙げられるとのではないかと思いわれますが、民間企業である当館においては事業で得られる収入において、お客様に還元すべき活動の全てを賄う、という根本的概念があります。私たちがお預かりしたお客様のお金で、館の運営や研究、よりよい展示やサービスをしっかり行い、スタッフ

やステークホルダーの方達が安心して活動できる状態を維持すること、できること、それが経営責任だという考え方です。つまり外部資金をうまく活用して経営する、という前提ではなく、外部資金はなくても事業を展開できている状態、これが民間事業の基本的な姿勢だとしております。

その前提において、当館は外部資金での展開を行う場合には二つの側面を重視して取り組んでおります。

一つは、外部資金の流入の仕組みを使うことによって、それまで成立しなかったステークホルダーやお客様との『関係が構築できる』ということ。これは会員制度やクラウドファンディングです。

もう一つの側面は、外部資金として制度化されているものが、当館の活動と組み合わさることで外部資金提供事業者と当館の『双方に社会還元への寄与というメリット』があるということ。これはスポンサーシップや助成金の活用です。

まず『関係の構築』の一例を挙げると、当館では一度だけクラウドファンディングを行ったことがありますが、これがまさに当てはまります。

この取り組みを行った当時はコロナで休館を余儀なくされ、お客様と対面で関係を作ることが全くできない状況でした。当然収入は激減していたのですが、前述したように事業維持は根本的経営機能ですので、クラウドファンディングによってそれを補ってもらう、という考えはありませんでした。クラウドファンディングを館内で企画した若いスタッフがおり、この整理はその企画の素案の段階で相当時間をかけて議論しました。その論点、私たちにとっての最大の不安は、私たちの仕事は社会的に不要不急のものなのか、社会的機能として必要なものなのか、という事業そのものの根本的な問いにもつながるものでした。当時はそれほど危機感を持って事業の将来について議論していました。その時に背中を押してくれたのが、「何かできることはないですか？」と多くのファンの方たちが言ってくれたことでした。水族館を開館できない中で、こうしたファンの方の想いの受け皿として、クラウドファンディングで何かが構築できるのでは、というのが若いスタッフたちの提案でした。実際にクラウドファンディングでは寄付金とともに必ずコメントを入れてくれるような仕組みにしており、結果的にはそのコメントが何よりも私たちスタッフを勇気づけてくれました。つまり、ファンとの関係づくりの強化においてクラウドファンディング実施の効果を享受できたということでした。

クラウドファンディングのプラットフォームには、ファンの方々が自分のできる範囲での支援を選ぶ仕組みや、私たちがお客様に素直に感謝を表現できる仕組みが散りばめられています。それがお金だけでなく、むしろ心の部分でも双方向機能となったことが、貴重な体験になっていきました。私たちが準備した返礼プログラムは、飼育スタッフによる特別番組の配信や飼育スタッフとの交流体験などでした。これは今までになかった様々な新企画交流サービス機能を有しており、孤立しそうになった私たちの仕事を社会的に意味のある繋がりに変えてくれた関係性強化の創造になったと考えております。おそらく返礼のプログラムの実施の費用は、いただいたものより多いものもあったかもしれませんが、「意味ある関係構築」という基本姿勢の指針には沿っているものでした。

もう一つ『双方に社会還元への寄与というメリット』です。外部資金として運用している水槽スポンサードという制度も、企業様が自社の地球環境、水環境に対する姿勢をどのように具体的に展開するかという情熱の受け皿として構築しております。ですから企業活動の一環につながるような、その企業のスタッフやステークホルダー様が真に実感できる体験のきっかけを常に意識しております。お預かりした資金や制度が企業様の目指す姿勢と一致しているかはとても重要で、そのマッチングに関しては常に配慮して進めております。例えば当館に様々にある水槽でも繁殖に関わる生き物の水槽があります。この水槽のスポンサードには貯蓄して増やす業務を行なっている金融機関様にご案内し、地元にしか生息していない生き物と環境を再現している水槽は、自然を再現している、その地域で活動されている企業様にご案内します。また淡水を商品として手がける事業を行なっている企業様には当館では数少ない淡水の水槽をご案内しました。

つまりスポンサードにおいては、その水槽や研究に関わる意義を、その企業様の事業内容や歴史、文化などと併せてご紹介します。このように企業様が取り組んでいる活動と当館の活動とがオーバーラップしていく状況で社会への発信、社会との関わりが強化されれば、双方にとっての意味ある機能となります。また企業様だけでは取り組みができない活動への参加を提案させていただき、水槽スポンサードだけではなく、地球環境、特に水や海や生き物に関わる活動のハブ的な存在として、水族館や外部資金制度が機能することもミッションとなっております。一例としては、様々な企業様へ毎月当館が行っている海岸の清掃活動（2009年より毎月行い2024.8で283回実施）への参加をご案内しています。一緒に活動していただくことで地域を巻き込んでの起こるムーブメントを体感していただき「実感としての社会的意義」を生み出したいと考えています。スポンサードしていただいている企業のスタッフの方が参加してくれています。

また、自社的には、助成金などの場合は、研究や活動に情熱を注いでいるスタッフが具体的に目標を定めて、第三者に認めてもらうことを重視しています。

私たちの活動は社会教育や基礎研究など社会的に重要な役割を担っていると自負しております。しかし、この自負は独りよがりになる可能性もあり、常に第三者的機関からの承認をいただくことで活動の品質が維持されると考えています。ですから助成金をいただけるということは、活動の社会的意義のレベルのお墨付きが社会からいただけていることと認識しています。客観的な研究の方向づけは、専門家にはもちろんのこと一般の方、助成していただける組織、事業自体など、様々な社会機能の理解と実績の構築が必要となります。実務としても、自分たちの事業をチェックする経営、営業機能、基礎研究力、学術機能、さらにそれを表現するためのデザイン、事務処理機能、など継続してそれらが行える組織の維持も必要になり、事業活動の維持・進化によりチャンスを社会から与えてもらえていると考えています。

外部資金の話になると、調達できるか、審査基準はクリアできるか、など実務的なところにばかり目がいきがちですが、『なぜ外部資金を活用するチャンス、許可を与えていただけるのか』それを本来の社会機能としての事業利益だけでなく『社会資産の底上げ』をする資格があるから、と捉え、その倫理的意味を常に意識することを重視しています。

改めて外部資金について考えてみると、初めてクラウドファンディングを考えた時にコロナ禍で盛んに言われていた、社会において必要不可欠な仕事、ソーシャルエッセンシャルワーカーという言葉を思い出します。

外部資金の制度は、直接的な支援目的を超え、事業を行うすべての従事者に社会との接点における高い事業倫理を維持するために、必要不可欠な社会機能だと考えています。その機能的側面に参画することを許されること、その実績を作らせていただけることは、社会ブランドとしての価値を社会から認めてもらえることで、これこそが具体的な金銭支援を凌駕する、倫理的な外部資金の、本当の価値だと考えております。

その前提ですべての計画を進めることが、結果的に自分たちが必要なものを手にいれる戦略にもなっていくことを実感しています。

「サイパル☆みらい基金」の創設と活用

旭川市科学館サイパル
主幹　中田　健裕

旭川市科学館サイパルは、旭川市青少年科学館（昭和38年11月開館）が老朽化・狭隘化したことから平成17年７月に現在地に新築移転し、「ふしぎからはじまる＜科学＞との出会い」をコンセプトに道北の科学教育の拠点として活動しており、来年、令和７年度に20周年を迎える。

「北国」「地球」「宇宙」の３コーナーに計42点の体験型展示機器や零下40度の体験を可能とする低温実験室を設置する常設展示室、直径17mの全天周ドームにカールツァイス製の投影機と４K相当のデジタル投影機を備えた定員170席のプラネタリウム、屋上には65cm反射鏡と20cm反射鏡の天体望遠鏡を備えた大・小天文台、その他、各種標本類や科学関連書籍を閲覧できるレファレンスルーム、理科実験やPC実習、電子工作や木工作ができる実習室、実験ショーや３D映像を楽しめるサイエンスシアターなど、科学館として必要な機能・設備をほぼ網羅した施設となっている。

旭川市は33万人程度の人口規模の街だが、博物館、美術館、科学館、文学館などの博物館施設が点在しており、2024年２月には旭山動物園が日本モンキーセンターに次いで国内動物園では２例目となる登録博物館となり、旭川市内の博物館施設は益々充実している。市民にはこれらの博物館施設を大いに活用して知識を高めてほしいと願っている。

さて、「活動財源をいかに確保するか」ということは、全ての博物館施設に共通する課題であり、悩みの種となっているはずである。

科学館は、科学の基礎知識を学ぶ場であると同時に最先端の知識や技術にも触れられる場であることが理想だが、それを実現するには先立つものがなければ如何ともし難いという厳しい現実が常につきまとってくる。自分は「金が無いなら知恵と汗を出せ」と諸先輩から教え込まれてきた世代ではあるが、令和の時代において後輩たちにそれを求めるのは心苦しくもあり、また、そればかりでは限界もあるだろう。そうでなくても年度を追うごとに容赦なく削減されていく予算の範囲内で充実した学習環境と機会をどうすれば用意できるか、皆、アイデアを絞り出す毎日を送ってくれている。

独自に財源を調達する手段は以前と比べて多様化しているが、それぞれ一長一短があり、どれを選択するかは目的や時間的な都合によるだろう。

国や都道府県からの補助金やクラウドファンディングなどでは、使途や期間が限定されていたり、手続きが煩雑であったり、実施に当たって別途に予算を確保しておく必要があったりなど実際に取り組むにはそれ相応の事前準備と覚悟が求められる。

では、基金の創設はどうだろうか。

基金を創設するに当たっては、とりあえず入れ物さえつくっておけば、中に入れるものは後でどうとでもできるだろう程度で始めても構わなかったが、それでは余りにもいい加減で説明にも困るだろうということもあって機会を窺っていた。そのような折、当館が大口寄付の受け入れ先に選ばれ、積立原資の目処がたったことからチャンス到来とばかりに年度末に間に合わせるべく急ぎ事務作業を進めて、令和３年２月に設置に至った次第である。

地方自治体が基金を設置するには、地方自治法第241条に「普通地方公共団体は、条例の定めるところにより、特定の目的のために財産を維持し、資金を積み立て、又は定額の資金を運用するための基金を設けることができる。」となっており、議会審議を経て条例化する必要があったが、自主財源の確保については度々取り上げられていたこともあって手続きは順調に進んでいった。

条例上は、先例に倣って「旭川市科学館施設整備基金」といかにもお役所らしく堅苦しい名称としたが、親しみやすいイメージをアピールしたいと考え、当館の愛称“サイパル”を入れた「サイパル☆みらい基金」のサブタイトルもつけてみた。

基金の積み立てには、ふるさと納税の受け皿とすることをメインに企業や個人からの寄付金を充てることにし、１年満期の定期預金で運用、預入先や利率の決定も含めて会計担当の部署に管理をお任せしている。また、ふるさと納税募集サイトへの登録や返礼品の取扱いなどは関連の事務を担う部署が一括で管理してくれている。

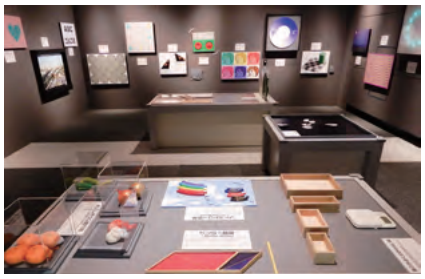
創設以来の積立金額は、次表のとおりとなっている。令和６年度は780万円程度の積み増しを見込んでいる。

年度	新規積立金額	運用利子額	年度末現在高
R2	14,000,000円	10円	14,000,010円
R3	1,833,410円	9,100円	3,491,824円
R4	61,694,997円	752円	64,345,636円
R5	5,525,625円	12,880円	30,168,592円

基金の処分は、条例で定めた目的以外の使途ではできないことになっている。

何かを定める際には、幅広く解釈、対応できるように“その他”の文言を文章に入れておくことがよくあるが、基金を管理する上ではあまり良いことではないように思う。当初に定めた目的が後々の解釈で曖昧なものに変わってしまうことは避けておきたい。

施設整備に係る基金となると施設の新築や大規模改修の資



いまの地球とみらいの地球　　錯覚いろいろコーナー

テック・ラボ　　10TOWN

金調達がイメージされ、また、施設整備の財源ということで建物本体や附帯設備の修繕費用に充当といった話も出てくることもあるだろう。理想を言えば、原状を回復するだけではなく、大きな上積みを得られること、施設利用者がその効果を直に感じられることを実現するために使いたい。

当館では、展示設備の老朽化や陳腐化に対処するための財源づくりを主目的とし、市内小中学校の夏休みなどの長期休暇期間に合わせて開催する企画展や特別展イベントの財源の一部に充てることも想定している。

当館がこれまでに基金を活用して行ってきたことは以下のとおりである。

年度	活用の内容	基金からの充当額
R3	常設展示新設（いまの地球とみらいの地球、錯覚いろいろコーナー） テック・ラボ開設	12,350,696 円
R4	特別展「恐竜ワールド」開催費（一部） 常設展示整備（錯覚いろいろコーナー）	841,937 円
R5	常設展示新設（10TOWN） 常設展示整備（錯覚いろいろコーナー、シアター映像コンテンツ） テック・ラボ機器増設（3Dプリンタ）	39,715,549 円

これからの作業だが、まずは目前の事案を優先したことで後回しにしてしまっている中長期的な活用の計画づくりを進める。

基金を貯めっぱなしで放置することなく、目標額に到達する度に新しい展示設備の設置や企画展・特別展などのイベント開催の財源としてすぐに活用できるように常々準備しておきたい。まさに「御利用は計画的に」である。しっかりとした計画の存在は、基金の使い途を安易に拡大させない予防策にもなるはずである。

次に「サイパル☆みらい基金」の知名度を高めることに注力していく。

現状は、ふるさと納税頼みのところがあり、他部局との寄付獲得競争においても大きく遅れをとっている感が否めない。ふるさと納税は、さほど手間はかからないものの返礼品に係る経費や手数料を差し引かれ、積立額が減ってしまうことからも今後は寄付額の全てを積み立てに回せる直接寄付の割合を増やすことにも積極的であるべきと考えている。その際には寄付額だけでなく寄付件数にも注目したい。当館の利用者の多くを占める旭川市内及び近郊の方々や地元の企業などからの応援が増えていくようであれば言うことなしである。「皆さんの応援でこんなことをします」「皆さんのおかげでこれだけの成果を上げられました」といった目標や成果の公表が新たな寄付の呼び込みにつながるという好循環を生み、基金が順調に育つことを期待したい。

「サイパル☆みらい基金」は、旭川市科学館サイパルを応援してくれる方々の善意の集合体であり、数多くある寄付候補の中から選択してくれている。選ばれた我々にはその期待に応える義務と責任があり、託された善意は一銭たりとも無駄遣いはできない。

そのことを肝に銘じて、より良い科学館づくりに一同で励んでいこうと思う。

「基金を創設する」となると大袈裟なことのように思われるかも知れないが、金銭的にも時間的にも余裕をもって取り組め、損失を被るリスクもほぼないことからもクラウドファンディングなどでの資金調達と比べてもハードルはかなり低いのではないだろうか。

皆さんも、なかでも公設公営の施設で頑張っている皆さんにはぜひチャレンジしていただきたい。

Panasonic
CONNECT

海外博物館事情

No.185
安井　亮

■ 施設の拡張・リニューアル

米オクラホマ科学博物館に、新しいプラネタリウムがオープン（2024年９月）

2024年９月20日に、オクラホマ州オクラホマシティ（都市圏人口：144万人）にある、オクラホマ科学博物館に、最新のハイブリッド型の光学式投映機を導入した、新しいプラネタリウム「ラブズ・プラネタリウム」がオープンした。同館は1958年の開館以来、プラネタリウムが設けられてきたが、新しいプラネタリウム（120席、ドーム直径15.24m）に、五島光学研究所が製作した「オルフェウス（Orpheus）」が導入された。総事業費：800万ドル。

Love's Planetarium.
Science Museum Oklahoma. Oklahoma City, Oklahoma.
https://www.sciencemuseumok.org/planetarium
https://www.sciencemuseumok.org/news/science-museum-oklahoma-announces-grand-opening-world-class-love's-planetarium
https://www.youtube.com/watch?v=uEpIehEgBso
https://www.youtube.com/watch?v=NHXcUZEu9lU
https://www.goto.co.jp/news/20170607/

米テキサス科学・自然史博物館が、リニューアルオープン（2023年９月）

2023年９月23日に、テキサス州オースチン（都市圏人口：247万人）にある、テキサス科学・自然史博物館が、旧称のTexas Memorial Museumから名前を変えて、リニューアルオープンした。1939年に開館した同館は1936年にメキシコからの独立100周年を記念した博覧会の時に、メインパビリオンとして建てられた建物のままだが、屋内では、常設展を含む大々的なリニューアルが行われた。最大の目玉展示は、エントランスホールに新しく登場した、全長10メートルのティラノサウルスの全身骨格標本だ。また新しく設けられた常設展示ホール「テキサス・トランスフォーメーション」では、約600万年にわたる、テキサス地方の生物の変容が紹介されている。また2022年３月にスタートしたリニューアル事業の一貫として、2025年３月には、子どもを対象とした古生物学発見コーナー（Discovery Center）も拡充されてオープンする予定だ。総事業費：400万ドル。

Texas Science and Natural History Museum. Austin, Texas.
https://sciencemuseum.utexas.edu/
https://alcalde.texasexes.org/2023/11/texas-science-and-natural-history-museum-reopens-after-renovations/
https://youtu.be/Z_WSdODRzW8

■ 常設展示

ウィーン技術博物館、気候変動展示をオープン（2024年３月）

2024年３月13日に、オーストリアの首都ウィーン（都市圏人口：290万人）にある、ウィーン技術博物館で、気候変動をテーマとした常設展示「気候．知識．行動！」がオープンした。約600m^{2}の広さをもつ「気候．知識．行動！」のコーナーでは、気候変動に関する重要なデータと具体的な例が提供されている。壁面展示は、化石燃料時代の始まりと現在を関連付け、歴史的な実物と現在の技術的成果を並べ、良い面と悪い面の両方で、絶え間ない技術的変化の状態にある社会を描いている。熱帯雨林の伐採などの大規模な環境破壊や、ここ数十年の世界気温の上昇率も、わかりやすく紹介されている。また氷河の縮小・融解も紹介されている。展示では、被害を記録するだけでなく、さまざまな例を使って、政策立案者、社会、そして各個人が、流れを変える行動を起こす責任があることを訴えている。オゾン層の穴を塞ぐなどの例は、世界的な協力と共通の政治的コミットメントが、どのように変化をもたらし、人命を救うことができるかを示している。

「気候．知識．行動！」は、いつでも展示内容を更新できるような形で設計されている。持続可能性を念頭に置いて、設計の計画および実施がなされており、また展示施工には可能な限りリサイクル素材や天然素材を使用し、個々の展示物（展示壁面、展示ケース、展示装置等）の再利用も確保されている。

Klima. Wissen. Handeln!
Technisches Museum Wien, Wien.
https://www.technischesmuseum.at/ausstellung/klima_wissen_handeln
https://www.technischesmuseum.at/presse/klima_wissen_handeln
https://www.youtube.com/watch?v=FYGx9P0JJrc&t=7s
https://www.youtube.com/watch?v=pRGNqbtG7OE

米スミソニアン国立自然史博物館、「NASA地球情報センター」をオープン（2024年10月）

2024年10月24日に、アメリカの首都ワシントン（都市圏人口：630万人）にある、スミソニアン国立自然史博物館に、アメリカ航空宇宙局（NASA）の地球情報センターがオープンした。同センターは、NASAが60年以上にわたって、地球と気候変動を調査・研究して得られたデータを、多くの人々に提供することが目的となって

設けられた。NASA地球情報センターが公開する地球に関するデータは、九つのテーマに分けられている:「農業」「空気の品質」「生物多様性」「災害」「持続可能なエネルギー」「温室ガス」「海面上昇」「野火」「水資源」。主な情報は、センター内に設けられた、大ビデオ画面（横：9.7m×高さ：3.6m）で、提供される。

スミソニアン国立自然史博物館にオープンした、NASA地球情報センターは、2023年6月にワシントンのNASA本部でオープンした、NASA地球情報センターについで、２番目の地球情報センターである。

Earth Information Center.
Smithsonian National Museum of Natural History. Washington, District of Columbia.
https://earth.gov
https://www.nasa.gov/news-release/nasa-smithsonian-open-new-exhibit-to-showcase-our-dynamic-earth/
https://www.nasa.gov/image-article/nasas-earth-information-center-at-the-smithsonian/
https://www.youtube.com/watch?v=eOsV0lPgffE

■ 企画展・特別展

米ミネソタ科学博物館で、こころの健康状態展を開催

2024年10月26日に、ミネソタ州セントポール（都市圏人口：371万人）にある、ミネソタ科学博物館で、「こころの健康状態：こころの問題」が開幕した。アメリカの成人の５人に１人が毎年精神疾患を経験していると考えられている。しかし、精神疾患に対する誤解や偏見はアメリカ社会に根強くあり、しばしば治療不足や不必要な苦しみにつながっている。そのため、こころの健康状態は、個人的、社会的、経済的な問題となっている。「こころの健康状態：こころの問題」展は、精神疾患に対する正しい理解を広めることが目的となっている。同展では、四つの展示テーマが用意されている。即ち、「心の健康が、私たちの健康全般の一部であること、そして精神疾患は他の疾患と同様、ありふれたものであり、誰にでも起こり得るものであり、また治療可能であることを理解すること」「精神疾患を抱えて生きる人々の経験を理解し、尊敬と受容を育み、精神疾患が現実に存在するという事実を理解すること」「感情を識別して表現することが、自分自身や他人をよりよく理解する上で役立つことを理解する」「助けを求めること、そして助けを求める人をサポートすることの大切さを理解すること」。

「こころの健康状態：こころの問題」展は、もともとフィンランドのフィンランド科学館「ヘウレカ」で企画・制作された国際巡回展であるが、アメリカの現状にあわせて再構成したものであり、ミネソタ科学博物館で2018年から2019年にかけて開催された同名のタイトルの特別展を、改訂したものである。今回の開催では、展示内容に関して、2017年から2018年まで、「わたしたちの心の健康状態のさまざまな側面（Many Faces of Our Mental Health）」を開催したボストン科学博物館から多くの助言を得た。担当キュレーター：Cari Dwyer。会期：2025年２月５日まで。

Mental Health: Mind Matters.
Science Museum of Minnesota. Saint Paul,Minnesota.
https://new.smm.org/exhibits-experiences/mind-matters
https://www.nmmhproject.org/the-science-museum-of-minnesota

加ブリティッシュコロンビア海事博物館で、気候変動展を開催

2024年10月31日に、カナダはブリティッシュコロンビア州ビクトリア（都市圏人口：40万人）にある、ブリティッシュコロンビア海事博物館で、気候変動をテーマにした企画展「太平洋の危機:気候変動、海洋の温暖化と、どのようにしてその潮流を変えられるか」が開幕した。同展では、太平洋にとって気候変動は何を意味しているかを明らかにし、また将来の世代のために、太平洋をどのようにして守るかを訴えている。担当キュレーター：Heather Feeney。会期：2025年3月25日まで。

Pacific in Peril: Climate Change, the Warming Ocean, and How to Turn the Tide.
The Maritime Museum of British Columbia. Victoria, British Columbia.
https://mmbc.bc.ca/exhibits/pacific-in-peril-climate-change-the-warming-ocean-and-how-to-turn-the-tide/
https://boatingindustry.ca/events-articles/mmbc-pacific-in-peril/
https://victoriabuzz.com/2024/10/pacific-in-peril-maritime-museum-of-bc-announces-new-exhibit-on-threats-to-ocean/
https://www.thescubanews.com/2024/11/02/the-maritime-museum-of-bc-launches-pacific-in-peril/

台湾・国立自然科学博物館で、気候変動展を開催

2024年７月10日に、台湾の台中市（都市圏人口：284万人）にある、国立自然科学博物館で、気候変動をテーマにした企画展「気候行動：われわれの将来×われわれの選択（Climate Action - Our Future Our Choice）」が開幕した。同展では、気候変動が人間社会と生態系に与える影響、および異常気象現象を鮮明に描写している。観覧者は、気候変動とのつながりを振り返り、行動を起こす動機となり、将来に向けた変革を促すきっかけとなることが期待されている。会期：2025年４月13日まで。

気候行動：全地球沸騰時代特展.
国立自然科学博物館.台中市,台湾省,中華民国.
https://web3.nmns.edu.tw/Exhibits/113/climate-action/en
https://youtu.be/6sN7iEWfkfg

List of special exhibition!

1月2月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊学館	ジオ・フェスティバル	1月12日
	とり+かえっこ	2月15日～2月16日
牛の博物館	郷土の企画展「森田純版画作品展」	1月25日～3月20日
秋田県立博物館	「秋田の宝　－県指定文化財展－」	2月15日～4月6日
高柳電設工業スペースパーク（郡山市ふれあい科学館）	ホワイエ企画展「望遠鏡と宇宙」	2024年11月2日～1月26日
	スペースパーク企画展「運動科学×リアル謎解きゲーム ナゾを解け！ネコの博士と3つのうごき」	2024年12月7日～1月13日
	ホワイエ企画展「星の進化をたどる」	2月1日～4月20日
つくばエキスポセンター	企画展「たのしい図形 ふしぎな図形 すてきな図形の大集合」	2024年11月16日～1月26日
ミュージアムパーク茨城県自然博物館	ミュージアムパーク30年のありったけ －いつも茨城県自然博物館はおもしろい！－	2024年11月2日～6月1日
日立シビックセンター科学館サクリエ	ミニ企画展示「家の中のおじゃま虫」	1月2日～1月26日
	ミニ企画展示「星の衝突で、何ができた？－月のうさぎと私たちの地球－」	2月1日～3月30日
	KAGAYA星空写真展	2月8日～4月6日
栃木県立博物館	テーマ展「ヘビなんて、キライ！」	2024年10月5日～3月2日
	テーマ展「昔のこと知ってっけ？～道具を知れば暮らしが見える～」	2024年11月23日～3月30日
	企画展「使者と生者の古墳時代～下野における6・7世紀の葬送儀礼～」	2024年12月14日～2月2日
	テーマ展「藤原秀郷とその末裔たち～語り継がれる史実と伝説～」	2月22日～3月30日
群馬県立自然史博物館	特別展「ぐんまの自然の「いま」を伝える」	1月18日～2月9日
川口市立科学館	科学の眼を持った天才　～レオナルド・ダ・ヴィンチの発明と未来への夢～	2024年12月14日～2月11日
千葉県立中央博物館	房総のミニチュア「生態園」～日本初エコロジー・パークの35年～	2月22日～5月6日
港区立みなと科学館	2024冬の企画展　水でつながる生命のものがたり	2024年12月11日～2月24日
国立科学博物館	特別展「鳥 ～ゲノム解析が解き明かす新しい鳥類の系統～」	2024年11月2日～2月24日
	企画展「貝類展：人はなぜ貝に魅せられるのか」	2024年11月26日～3月2日
たばこと塩の博物館	日常をつくる！企業博物館からみた昭和30年代	1月18日～3月23日
郵政博物館	巳年年賀状展	2024年12月21日～1月19日
	東海道絵巻－憧れの旅路－	1月25日～2月24日
日本科学未来館	パリ・ノートルダム大聖堂展	2024年11月6日～2月24日
多摩六都科学館	冬の特別イベント「ロクトロボットパーク2024」	2024年12月25日～1月13日
	「天から送られた手紙」にふれてみよう～雪と氷がおしえてくれること～	2月8日～3月2日
神奈川県立生命の星・地球博物館	企画展「すな－ふしぎをみつけよう－」	2月22日～5月11日
平塚市博物館	中勘助と鳥、の物語	2024年11月23日～1月13日
	火星が近づく	2024年12月19日～2月2日
	第24回博物館文化祭	2月7日～2月27日
	みんなで調べよう「平塚のカマキリ」結果報告！	2月7日～4月6日
富山市科学博物館	第32回「私の身近な自然展」	2024年12月21日～2月16日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開　催　館	展　覧　会　名	開　催　期　間
岐阜かかみがはら航空宇宙博物館	月への挑戦　−アポロ計画から50年、人類は再び月を目指す−	2024年10月12日〜3月9日
	ドラえもん科学ワールド　空を飛ぶしくみ	2024年12月7日〜4月7日
ふじのくに地球環境史ミュージアム	全地球史展	2024年12月14日〜3月23日
	第7回ふじミュー写真展	2024年10月12日〜1月13日
静岡科学館　る・く・る	企画展「カガクの『？』をカタチにする展」〜疑問を探究するっておもしろい〜」	2024年12月21日〜2月16日
豊橋市自然史博物館	干支展　巳	2024年12月14日〜1月19日
名古屋市科学館	特別企画「ニンジャアカデミー」	2024年11月30日〜2月24日
京都鉄道博物館	『シンカリオン チェンジ ザ ワールド』in 京都鉄道博物館	2024年12月21日〜3月2日
大阪市立科学館	企画展「万博で夢見たサイエンス展」①	2024年12月6日〜1月26日
	企画展「万博で夢見たサイエンス展」②	2月5日〜4月6日
高槻市立自然博物館（あくあぴあ芥川）	企画展「あくあぴあと私　〜30年間の足あと〜」	2024年10月5日〜1月26日
	企画展「私の水辺」展	2月1日〜3月2日
きしわだ自然資料館	特別展「海のめぐみをいただきます！」	2024年11月2日〜1月13日
阪神・淡路大震災記念人と防災未来センター	1995.1.17から30年。あらためて知る 阪神・淡路大震災 〜30年を振り返り未来を展望する30コラム展〜	1月4日〜3月30日
神戸市立青少年科学館	冬の企画展「ゴーストたちとあそぼう！ふしぎなへや」	2024年12月14日〜1月26日
	第27回鉄道模型とあそぼう	2月8日〜2月11日
伊丹市昆虫館	特別展「盛口満　原画展〜ゲッチョ先生の宝箱〜」	2024年11月30日〜2月24日
鳥取県立博物館	企画展「幕末土佐の天才絵師 絵金（えきん）」	2024年11月30日〜1月13日
島根県立三瓶自然館	冬の企画展「第45回SSP展　自然を楽しむ科学の眼」	2024年12月21日〜1月26日
人と科学の未来館サイピア（岡山県生涯学習センター）	天文同好会岡山アストロクラブ天体写真・星景写真展 「星降る空へようこそ2025」	1月19日〜2月16日
倉敷市立自然史博物館	特別陳列「畠田和一貝類コレクション展11　畠田和一が採集していた岡山県の絶滅危惧種7」	2024年10月12日〜3月23日
	特別陳列「新着資料展　世界のチョウ類−竹中一夫コレクション①−」	2024年12月14日〜1月26日
	特別陳列「みんなの動物ラボ」	2月4日〜3月22日
笠岡市立カブトガニ博物館	特別陳列「八百万のカブトガニ」展	2月1日〜4月6日
広島市江波山気象館	企画展「ボールでチャレンジ！科学あそび広場」	1月25日〜3月16日
愛媛県総合科学博物館	企画展「石のワンダー」	2024年12月14日〜2月2日
	企画展「宇宙で食べる・宇宙で生きる」	2月22日〜4月6日
佐川地質館	特別展「洞窟に落ちた動物たち」	2024年5月18日〜5月6日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「調べる・くらべる、地域とくらしと道具のうつりかわり」	2024年11月30日〜3月23日
	冬の特別展「博物館のお正月2025 〜お正月をさぐる〜」	1月2日〜2月2日
福岡市科学館	特別展「毒」	2024年10月11日〜1月13日
熊本県博物館ネットワークセンター	くまもとの大地の成り立ち 〜その10年間の記録〜	2024年11月11日〜2月2日

※次号（3月号）に掲載の3月4月の特別展情報は1月20日（月）までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号（３月号）に掲載のリニューアル情報は１月10日（金）までにお寄せください。

京都市青少年科学センター

［更新箇所］　展示場３階の京都の地質コーナーのリニューアル
（展示品再生＋移設等による空間再構成）

［更新内容］　「ジオエリアKYOTO～京都の地質を感じよう～」は、京都市の土地のなりたちについて、複数の展示品を通して紹介するゾーン展示です。
具体的には、京都市内を流れる河川の川原の石300個で取り囲んだ３Ｄ地形図に、上部から地質図等をプロジェクターで重ねて投映することにより、様々な角度から京都市と周辺の地形･地質を観察できる「重ねて見る京都の地質」、２つのよく似た石をクイズ形式で比較する「京都で見つけた気になる石」、地質調査等を自作の映像で紹介する「地面の下の調べ方」の３つの展示品を、京都市の東部と西部の地層の剥ぎ取り標本の間に配置したものです。また、これらすべての展示品は､カーボンニュートラルの観点から、既存展示品を再生（筐体・立体地形図の再利用）し再構成したものです。
お客様が実際に石や地層にふれて、映像や地質図で確認することにより、地味ながら意外と奥深い京都市の地形や地質について、興味関心を持っていただけることを期待しています。

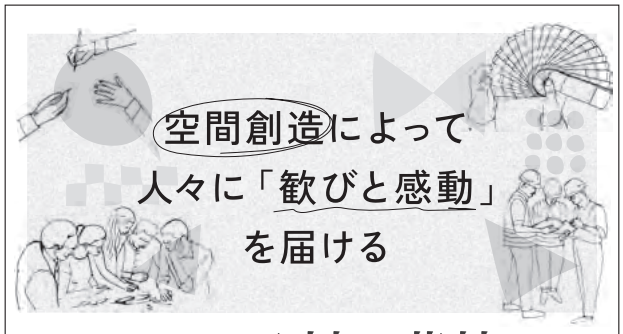
［更新面積］　約84㎡

［公 開 日］　2024年3月23日

［準備期間］　約９か月（製作業者決定からは約５か月、館内作業約３週間）

［担当業者］　株式会社ノムラメディアス

［総 工 費］　約700万円（株式会社村田製作所様からの寄付金を充当）



株式会社 乃村工藝社
東京都港区台場２丁目３番４号 TEL：03-5962-1171（代表）

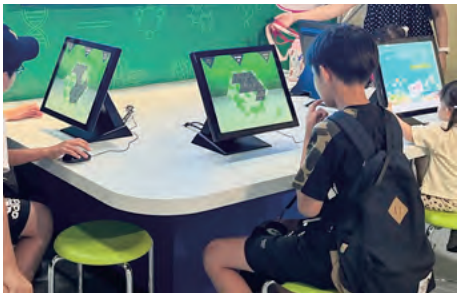
こころを動かす空間をつくりあげるために。
調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営
Tanseisha
空間創造のプロフェッショナル 株式会社丹青社
〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100（代表） URL|www.tanseisha.co.jp
札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海

つくばエキスポセンター

［更新箇所］　１階展示場に「エキスポチャレンジコーナー」を新設

［更新内容］　１階展示場に新しく設置した「エキスポチャレンジコーナー」では、パソコンを使ってパズルやクイズに挑戦し、楽しみながら学ぶことができる展示です。
クイズは、元素や元素周期表、地質の問題を通じて、知識を深めたり、新しい発見を楽しめます。パズルは、図形の模様を組み合わせてゲーム感覚で論理的思考や想像力を鍛えることができます。
子どもから大人まで幅広い年齢層が挑戦できる内容で、知識を身につけたり、家族や友人と協力して解くことで「考える楽しさ」と「解く達成感」を味わいながら、コミュニケーションのきっかけとなります。この展示を通じて、頭を使って試行錯誤しながら解く楽しさを体験できる展示となっています。

［公 開 日］　2024年７月29日



徳島県立あすたむらんど子ども科学館

［更新箇所］　子ども科学館　常設展示場　生命と環境フロア
「＃爬虫類のいる生活」

［更新内容］　子ども科学館の常設展示場「生命と環境」フロアに生体展示の新コーナーが加わりました。生体展示コーナーに新たに加わったのは、グリーンイグアナ･コーンスネーク･キタアオジタトカゲ・ボールパイソン・サバンナモニターの、５種類の爬虫類たちです。これまでにもさまざまな展示をしてきたこのフロアですが、爬虫類の生体展示は新しい試みであり、お客様が、爬虫類を間近で観察しながら、自然界の不思議に触れることができる展示となっています。また、展示スペースには、爬虫類に関する解説やクイズも掲示されており、小さなお子様から大人の方まで、楽しみながら学んでいただけます。今後、実際に爬虫類たちと触れ合うことのできるタッチングの時間を設けたいと考えています。

［公 開 日］　2024年10月５日

［担当業者］　指定管理者株式会社ネオビエント

TOKYO SCIENCE CO., LTD.
ミュージアム・ショップ向／教育用地学標本
地学標本／化石・鉱物・岩石
古 生 物 ／レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル
since 1974
◆常設ショールーム：紀伊國屋書店・新宿本店1F　TEL.03(3354)0131(代表)◆
Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail:info@tokyo-science.co.jp
〒151-0051渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
Practical Specimens for Study of Earth Science

KONICA MINOLTA
Giving Shape to Ideas
DYNAVISION-LED
LED DOME SYSTEM
革新的なテクノロジーを結集した
新しい LED 映像システムで
リアルな臨場感と美しい映像体験を
コニカミノルタプラネタリウム 製品　検索
画像： コニカミノルタ プラネタリウム 満天 NAGOYA

我が館の推しなモノ・コト

第56回 愛媛県総合科学博物館　鈴木　裕司

全天星図

愛媛県総合科学博物館公式HP
https://www.i-kahaku.jp

当館の常設展示は「自然館」「科学技術館」「産業館」の３つからなり、その最初に当たる自然館の宇宙のゾーンにあるのがこの全天星図です。観測データに基づいて約 17.3 億個の恒星を描くことで作成しており、天の川が恒星の集まりだと実感できます。また、ところどころに恒星の集団である星団を見つけることができ、天体探しを楽しめる星図となっています。なお、裏面には全天写真星図があり、星雲や銀河を見つけられます。

予告 次回執筆者は、大阪市立科学館 学芸員 猪口 睦子さんです。

令和６年度第２回理事会・総会及び第32回研究発表大会の開催

▶とき：令和7年2月12日（水）・13日（木）・14日（金）　▶ところ：兵庫県立人と自然の博物館およびオンライン

２月に令和６年度第２回理事会・総会を開催します。１日目の理事会・総会では、来年度の事業計画および予算案等を協議いただきます。講演もございますので、みなさまのご参加をお待ちしております。

２日目、３日目には第32回研究発表大会を開催します。今回は「博物館が提供する様々な経験―教育、愉しみ、省察、知識共有の観点から」をテーマにポスター発表を含む33件の発表がございます（ポスター発表は現地のみでご覧いただけます）。この機会を情報収集、情報発信の場として活用していただけますと幸いです。

それでは、みなさまとお会いできることを楽しみにしております。

※今後の社会情勢によっては、開催方法を変更する可能性があります。

JCSM Japanese Council of Science Museums Newsletter 全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子（神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員）
南部　靖幸（熊本博物館学芸員）
西田　雅美（公益財団法人日本科学技術振興財団
所沢航空発祥記念館主査）
平田慎一郎（きしわだ自然資料館学芸員（特命参事））
弘田　澄人（川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館）
天文担当係長）
望月　貴史（岩手県立博物館専門学芸員）
関根　則幸（国立科学博物館学習支援部広報・連携課長）

全科協事務局

国立科学博物館
学習支援部 広報・連携課
（担当：中山・斉藤・清水）
TEL 03-5814-9171
info@jcsm.jp

発行日　2025 年 1 月 1 日
発　行　全国科学博物館協議会©
〒110-8718
台東区上野公園7-20 国立科学博物館内
印　刷　株式会社セイコー社